焼打ちの思い出

酒井　温

たつみ第六号の木畑さんの米騒動余談を見て、五十年前の本店の焼打ち状況を間近に見た記憶がまざまざと生々しく目の辺りに甦って来たので、一寸したお役目も勤めましたので此の機会に記録に止めさせて頂き度いと思い、書くことに致しました。

木畑さんの文献による大正七年八月十二日の夕方、暗くなって間もない頃、神戸の山手の熊内の電車通りの角にあった、いろは湯と云う銭湯を出て手拭を下げて熊内台地の宅に帰える長い坂道をぶらぶら登って行くと、火事だと云うので、急ぎ足で坂道を登り布引側の高台から火事の方向を見ると、南の方角で三階建てと思われる高い家が燃え上っているのを見て、本店ではないかと直感したので、近くの依岡専務の宅へ知らせ、同じ近くの松田技師長の宅へ飛び込んで知らせた処、松田さんから君は本店へ急いで行って確め脇浜へ連絡せよ、僕は今から工場へ行く、と云う指図を受けたので、今の様なタクシーなどは無く、電車も動かないので、熊内から栄町通り六丁目角にあった神戸新聞社まで息を切らして走せ付けた時は、電車通りの曲り角の向い側の三階建ての大きな木造家の本店は既に無惨にも燃え盛っていて、凄まじく恐怖の巷と化していたので息詰る様なショックを受け、呆然自失した次第であった。

之に対して数百と思われる異様な風体の屈強な暴徒が歓声をあげて本店を取り囲み、電車通りの中央に薪を積み上げ、近くの油屋から取って来た石油をぶちかけ松明とし、之を暴徒がてんでに持って本店内へ走り込み、噴怒の形相で撒き散らすと云う全く目も当てられぬ表現に苦しむ凄惨な暴状であった。之に対し消火のため放水する消防士は袋叩きにされ、筒先を暴徒に向けても多勢にかなわず、一方警官隊も問題にならず騎馬巡査も馬から引づり降される有様で、全く無警察の状態で、他国の革命運動も斯やと、初めて平素の治安の有難味が身に浸みた次第であった。眼前に間近く本店の燃え盛るのを見て呆然として居ると、次は脇浜の神戸製鋼所の焼打ちだと云う流言を耳にしたので、ハッとして最初のお指図を思い出し、急ぎ脇浜へ知らせねばならぬが、何様各所の米屋や質屋が焼打ちされ数ケ所に火の手が上って居り、治安が悪く、反鈴木の一般市民の私語が過敏に耳に入るので恐怖心に襲われ不安で電話もかけられず、電車も止っているので三ノ宮辺りまで走り、人力車を見付けたので神鋼まで急いで呉れと車に乗った処、幾らでも成丈け沢山先に車賃を呉れと云われ不気味と不安の思いで走らしたのであった。漸く神鋼へついて見ると既に灯下管制をして真っ黒な中で重要書類を、丁度休止していた製鋼用の平炉の中に運び、不安な暗黒の中で沈黙の待機の状態にあった。その時、外の方から投石があったので、待機の一同はスワッとばかり立上ったが、悪質な徒と判ったので黒暗の笑声となった。併し臆病風を生身にサッと感じた思いであった。投石恐怖の後に大手の本邸が焼打ち中であるとの情報があって応援は間に合わないが、お見舞に急行する事になり、代表者を抽籤の結果、お使者に貧弱な私が当ったので早速、柔道や剣道の心得のある屈強の若者五人を同行することとし、途中暴徒と遭遇した場合に仲間と見せかける様な風体に装い、夜中の一時に脇浜を出発し、坂を登って上筒井通りに出て、山手の市電のレール伝いに中山手通りより兵庫を経て大手に向ったのであるが、神戸市内は真っ黒の中に荒れ狂う暴徒の襲撃を受け、焼打ちされた家の余炎が数ケ所あり、市中は薄気味悪く静かなれど、家人は黒暗の戸外に出て私語して居るのが耳に入り、吾々一行を暴徒の一味と見ているらしく聞える反面に、本物の暴徒に遭遇することを恐れ、警戒しながら漸く朝の四時に大手の本邸の門前に安着したのであるが、驚いたことに焼打ち処ではなく、門内は深閑として人の気配もなく、不審に思い門内を覗いて見ると、広大な庭の芝生一面に薄黒暗の中に沢山の人が寝転んでいるのが見えたので、神鋼から御見舞に参りましたと大声で伝えると、総立ちになり門を開かれたので御挨拶をしたのであるが、薄黒暗の中の吾々の風体を門内より覗き見られ、最初は警戒して開門しなかったとの事であった

深夜三時間の強行軍で使命を果した吾々一同は、須磨の海岸で海水につかり脇浜へ引挙げた次第であるが、米騒動に因る焼打ち騒ぎも十四日出動の、姫路師団の剣付あご紐の兵隊さんの御蔭で沈静し、治安維持の有難味を痛感した次第であった。

私は明治四十三年に鈴木商店が、英・独より二つの製糖プラントを輸入し、台湾の鈴木直系の北港製糖会社の北港と月眉に建設の為、辻湊さんに従って渡台し六年間、製糖に従事し、その後二社を合併し五工場を持つ東洋製糖会社と改称されたのであるが、私は大正五年に神鋼へ転勤致し、海外諸国の製糖工場を見学し、戦後二十八年には中華民国となった台湾の糖業公司の各工場を歴訪したのですが、稿を改め度いと思って居ります。

◎原稿募集

内　容　随想、詩、和歌、俳句、絵写真等

用　紙　原稿用紙四百字詰四枚程度

締切り　昭和四十二年十月十五日

送り先　神戸市生田区三宮町一丁目三神ビル五階
太陽鉱工KK分室
たつみ編集部宛

岡山精米所時代と米騒動の想い出

（遺稿）土居英成

私が岡山精米所に参りましたのは、大正五年の春でした。この精米所は、一昼夜に精米二百五十俵即ち百石を精白にする能力を持っていまして、一ケ月に三千石の買付けをするには随分と苦労をしたものでした。

ところが、ここに兵庫米問屋生え抜きの人で、米の鑑識に掛けては名人と、人も許した松下豊吉という年配の方が精米所へ来られましてからは、全国の米の出来ばえを一々詳しく実地に視察して廻って、必ず各停列車に乗り、乗客中の農民とも話し合って、その年の日本全国の作柄の予想高を発表するのに、政府の調査よりも、より正確のようでした。それがためか農商務省は、鈴木商店の意見を一応聞いて其の年の作柄予想を発表して居ったと耳にしました。当時の米価は昨今想像も出来ぬ程の安値であって、農民の生活を脅す状態であったので、価格調整の意途の許に米の輸出を計画し、其の仕事を鈴木商店に要請したが、秋の収穫迄待って買付けしていては到底予定の数量に達せぬというところから、松下さんは全国の米所を廻って刈入れない前に、買入れの予約をしました。これを世間では青田買いと云いました。そして全国を廻って買付けをする松下さんには〝雀のオッサン〟という仇名を呈上せられていました。

この当時の米価は最上等で石十四、五円でした。当時は欧州戦乱当時で、又米の仕事は特別に面白い愉快な仕事で、店員一同はそれこそ朝早くから夜遅く迄、緊張し切って仕事したことでした。

松下さんの米のすぐれた鑑識に就いてその一例を申しますと、買付けた数千俵の中から数種の米をボテに入れて、その生産地を尋ねますと、これは何国の産、これは何国の産と一々図星を指すことは全くのお米の神様のような肌の人でした。

当時の米の仲買人は、西大寺では鈴木商店、倉敷では根岸商店でしたが、地元の三備地方の買付けは随分思い切って買付けしたものでした。船は旭川川口の三幡の河口屋が帆船を周旋して、米所の麻袋入りの精米をどんどん神戸へ送ったものでした。その当時、所員の特別の贅沢と思いましたことは、この沢山の米俵の中から松下さんがサスを入れて一番にご飯焚いて、おいしいものをご馳走してくれたことでした。

そこで、この鈴木の活躍振りに対して商売敵から誤解を受け、米一升が十三銭にも上ったことは、之は畢竟鈴木商店が米の商売をするからであると、北陸地方の漁師のお神さん達が八釜しゅう云い出して、所謂米騒動が起りました。また之を大ぎょうに伝える新聞があって世間をあおったものですから、余勢は忽ち神戸鈴木本店に飛び来たりまして遂に大正七年八月十二日夕方頃、空虚の宣伝に乗った群衆は、遂に川崎町一丁目の本店に押し寄せて来て焼打ちをしたのでした。前の神戸新聞もその時、焼かれました。幸いなことには鈴木商店は営業が終ったら毎晩帳簿を全部、幼年店員（ボンサン）が胸